

2014.4.20 「神の愛を喜ぶ」ヨハネによる福音書3:16~21

復活のメッセージは、「死の克服」と「罪からの解放」であり、私たちはそのことを“喜ぶ”という意味において復活を祝う。ただ、初代のキリスト者たちは、この復活の出来事を単に、“死の克服”とか、“罪の解放”ということに留まらず、新しい時代がここから始まったこと、歴史の未来に向って、新しい展望と希望とを告げる告知として受け取った。今も生きておられるキリスト、世界の闇の中へと歩み出して行く教会・・・復活されたイエス・キリストと共に、この世の荒波に漕ぎ出して行く。そういう意味づけを初代のキリスト者たちは抱いていたようである。私たちの教会もそのことを覚えたい。

3章の初めにイエスとニコデモの話がある。ニコデモという人物は、ユダヤ人の議員でとても偉い人の方である。ある夜イエスを尋ねてきた。ニコデモは何を質問したのか。イエスのこれまでの歩みを知らされる中で、「どうしたらあなたのように、神と一緒に居てくださる生活が出来るのか」という質問であった。この訪問者は、律法を重んじ、一生懸命に良い働きもしてきた者であろう。でも彼は、神と一緒に居てくださる生活を感じきれないでいた。イエスは、その質問に対して「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と答える。ニコデモは「年をとった者が、どうして生まれることができます。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」と答えた。彼が期待した答えは、もっと具体的な答えだった。何と何をしたら神と共に歩む生活が出来、神の国を見る事が出来るという具体的なことを期待していた。そこには、自分の努力、修業、鍛錬によって“救われる”という考えがある。伝道、献金、聖書の言葉通りに歩まなければ・・・救われない。そういう人間の努力によって、私たちの救いが成り立つかのように思うことは私たちにもないだろうか。

人間の努力によって勝ち取ろうとする“救い”に対し、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と、神の側から“救い”はもたらされているとある。イースターとは、イエス・キリストの十字架の愛に気付き、今も生きておられる復活の主を覚えること、その神の愛を喜ぶことなのである。教会はこの“喜び”をどう世に伝えようとしているのか。(神谷)